

読解教材としての新聞記事の可能性

中 村 美 咲

はじめに

新聞記事は、教材になりうる最も身近な生の文章の1つである。日本語教育において、新聞記事は古くから教材として取り入れられているし、今日では、新聞記事を一冊の教科書にして出版した教材も少なくない。しかしながら、果たしてそれらは新聞記事の教材としての可能性を十分に発揮したものであるのだろうか。本稿は、「教材としての新聞記事にはどのような可能性があるのか。」「どう活かせば有効な教材となるのか。」といった問題を先行研究と自身の実践をもとに考察したものである。

1. 対象クラスと読解能力

徳山大学では1年次の留学生を対象に、日本語Ⅰ～Ⅵが設けられている。2001年度は、日本語Ⅴ、Ⅵは必修、日本語Ⅰ～Ⅳに関しては、それぞれの能力に応じて必要があれば履修するように位置付けられていた。2001年度の日本語の授業内容は以下の通りであった。

日本語Ⅰ、Ⅱ；基礎固めをするためのクラス

日本語Ⅲ；主に読解能力を伸ばすためのクラス

日本語Ⅳ；主に大学生活で必要なコミュニケーション能力を育成するためのクラス

日本語Ⅴ；専門的な文章を読む力をつけるためのクラス

日本語Ⅵ；主にレポートや論文の作成を想定した表現能力を伸ばすためのクラス

本稿は、「日本語Ⅲ（2001年度前期）」に関する報告、考察である。「日本語Ⅲ」は1週間に2コマ行われた。受講生は、中国からの学部留学生が21名、台湾からの1年間の交換留学生が2名であった。日本語能力は、大体の学生が日本語能力試験の2級以上1級以下であった。また、初めて来日した者も数名含まれており、大部分の学生が、日本、母国を問わず、大学で勉強することが初めてであった。

次に、読解力についてだが、『日本語教育事典（1987）』では、読解力を以下のように詳述している。

1. 文字を読みとること
2. 文字の意味を知ること
3. 文字によって構成される語の意味を知ること
4. 語と語との意味的、構文的関係を知ること
5. 語とそれが含まれている句との意味的、構文的関係を知ること
6. 句とそれが含まれている句との意味的、構文的関係を知ること
7. 句と句との意味的、構文的関係を知ること
8. 句とそれが含まれている文との意味的、構文的関係を知ること
9. 文と文との意味的、構文的関係を知ること
10. 文と段落との関係を知ること
11. 段落と段落との関係を知ること
12. 段落の大意や要旨をつかむこと
13. 文章の大意や要旨をつかむこと
14. 読み手に必要な内容かどうかを知るために全体をざっと読むこと
15. 未習の語彙や文型などを前後関係から類推すること
16. 書かれてある事実と書き手の意味とを判別すること
17. 書かれていない書き手の意図や立場を探ること
18. 書かれていないが当然予想される発展や結果を推量すること
19. 読み手の価値判断をもちながら批判的に読み進めること

大部分の受講生は、このうち1から13までの能力を、大学入学以前の体系的な日本語指導のもとで、ある程度身につけていた。逆に、入学以前にあまり練習することのなかった読み方が14から19の読み方であった。また、大学での学習を円滑にするために求められる日本語の読解能力も、13から19の能力である。13から19の能力を育成することを目指せば、当然、速読や多読を重視しなければならない。それまでの精読中心の読みから、速読や多読の技能と精読の技能とをバランスよく組み合わせた読み方が求められてくる。

また、文章理解の過程は Top-Down 方式と Bottom-Up 方式の相互交流で成り立っている。今回の受講生の場合、ある程度の日本語能力は身につけているのだが、日本について、また、日本の大学での学習についての経験や予備知識を補強する必要性、Top-Down の力をつける必要性があった。そこで、Top-Down の力のもととなるもので身近なもの、そして、速読、多読と精読を組み合わせた読みをするのに有効なものとして、新聞記事の教材化の可能性を見出した。

次に、新聞が教材として有効に使える学習者のレベルについて考えてみる。『日本語教育事典（1987）』では、「新聞雑誌を読もうとすると、1000字以上の漢字を習得しておかなければならない。」とされている。日本語能力試験では、1級の認定基準の習得漢字数は2000字程度、2級の認定基準の習得漢字数は1000字程度とされているので、習得漢字数から見ると日本語能力試験の1級と2級の間のレベルにある学習者に、新聞は適した教材であると考えられる。また、青木惣一（1995）では、新聞・ニュースの高頻度語彙と1級語彙との重なりが多く見られることが指摘されている。語彙を増やすという観点から見ても、新聞を読むことは、2級と1級の間のレベルにある学習者に有効なことであると考えられる。

さらに、徳山大学の言語教育以外を担当する教員に対するアンケートでは、回答を得た25人のうち14人が授業で新聞記事を用いるという結果であった。また、扱う新聞記事の量としては、一番多い教員で、新聞を開かない大きさ

の3分の1、一番少ない教員で10分の1という回答が出ており、読むこと自体に使う時間は、5分程度というのが最も多い回答となっていた。このことから、多読や速読の能力の育成、新聞記事を読む能力の育成が、専門教育への橋渡しとしての日本語指導に欠かせない課題となっていることがわかる。

2. 新聞記事の選び方と教材化

中村重徳(1993)では、現在出版されている教材(新聞を読むことを主眼にしたもの3点と応用練習として新聞記事を取り入れているもの1点)に採用されている記事の内容の分類が行われており、以下のような結果が出ている。

社会-18 / 政治・国際情勢-13 / 産業・ビジネス-10 /
文化・芸能-7 / 科学・技術、投書-6 / 経済-5 / 労働-4 /
教育-3 / スポーツ、テレビ・ラジオ欄、天気欄-2 /

この結果から、これらの教科書が、ある種の偏った「日本像」を学習者に提供する可能性を含んでいることがわかる。新聞記事を教材化して出版した場合、記事を選び取った作成者側の「日本」が含まれざるを得ない。また、最新情報を文字で伝えるという新聞の最も重要な特性も失われてしまう。そこで、今回の実践においては受講生に最近の新聞記事を自由に選ばせるという方法をとった。これは新聞記事を読む能力だけではなく、自分と新聞記事との関係の中で、日本のこと、自分の国のこと、さらには自分のことを見つめる力を育てたかったからである。受講生は、全国紙、地方紙、専門紙等、様々な新聞から様々な記事を選んで来た。選んだ記事には以下のようなものがあつた。

- ・「ありがとう」という言葉の大切さを述べる読者の投書
- ・2001年版通商白書の分析結果
- ・猟犬が野生化し、老人を襲った事件
- ・ボランティアのあり方を問う読者の投書

- ・不妊症治療のためアメリカの研究所が赤ちゃんの遺伝子組み換えを行ったこと
- ・障害児教育に関する本の書評
- ・「29歳ってがけっぶちなの？」というテーマでの紙上討論
- ・徳山大の入学式
- ・社会人野球チームとチームを支える地域の人々について
- ・首相の手腕を冷静に見ようと訴える読者の投書
- ・阿刀田高の旅に関するエッセイ
- ・高額納税者リストの分析
- ・負傷していた貴乃花の22度目の優勝を伝えるもの
- ・江波戸哲夫によるサラリーマン社会に関するエッセイ
- ・保育園での野菜作りの様子を伝えるもの
- ・野菜の名前がわからない高校生が増えてきているという調査結果
- ・学校乱入殺傷事件をきっかけに、法律改正の可能性が出てきたことを伝えるもの
- ・中国のゴールデンウィークについて（中国語の訳つき）
- ・小泉首相の沖縄訪問について
- ・日本語とジェンダーについて
- ・各月刊誌の田中外相批判の分析

これらの受講生の選んだ記事を教材化するわけであるが、記事の性質は、設問にも影響を及ぼす。

一般的に、新聞記事には、「いつ」、「どこで」、「だれが」、「なにを」、「なぜ」、「どのように」が明確に示されている。したがって、教材化するときにも、5W1Hを問う問題が作りやすい。こういった5W1Hを問う問題は読解力の中でも、「文章の大意や要旨をつかむ」いわゆるスキミングの力をはじめとして、スキッピングの力、速読の力を伸ばすことにもつながる。また、この5W1Hを問う場合でも、リードや1段落目のみからでも問うことができる場合と、全体を見て、やっと問うことができる場合とがある。後

者の場合、要旨の核を問うような問題を最初に設定する必要があった。

一方、5W1Hを問うことが難しい記事もある。投書、「軟派」記事、サイド記事、続報といったものがそういう傾向をもちやすい。投書の場合、客観的な事実を伝える性質は、ほとんど持たず、その人個人の意見、感想などといった主観が色濃く現れる。投書ほど、色濃く主観が現れるわけではないが、「軟派」記事にも似たような傾向がある。また、サイド記事、続報などでは、事件のあらましが省いてあることが多い。こういった記事の場合は、読解を始める前に、教師や記事を選んだ学生が、その事件に関するおおまかな知識を学習者側に提示して、Top-Downの準備をしておく必要がある。このような種類の記事の場合、正誤を問う問題が特に有効であり、問題を作る際には、要旨からはずれない問題を作ることが読解力を伸ばす上で重要となる。

また、Bottom-upの効果を狙い、段落ごとに分けて、話の筋を追っていくような構成の設問も行った。特に、長めの記事や、知識、経験の不足のため、Top-downの行いにくい記事に、その方法は有益であった。

さらに、先に挙げた『日本語教育事典(1987)』の読解力の16から19の練習の発展として、「自分」をくぐらせる問題を設定した。このような問題は、主観が表れる投書や「軟派」記事の場合、設定しやすい。記事に対する学習者の感想を述べさせるもの、賛否を問うその理由を述べさせるもの、自分自身を記事に登場する人物の立場に置き換えて事態を考えてみるものなどがこれに当たる。こういった設問では、日本語能力や考察力をはじめとする基礎学力を伸ばすことの他に、「日本」や「母国」、さらには「自分」について考え、「異国」という環境への適応を手助けする機会となることを期待している。

また、表を文章化したような記事は、問題を作る際に表を埋めるような問題を準備し、その表を埋めることで内容が把握できるように、また、内容の把握状況が確認できるようにした。

例外的なことにはなるが、学習者の選んできた記事の中に、中国語の訳の

ついたもの（『留学生新聞』）があった。この場合、翻訳についても考える機会になると思ったので、中国語訳をつけたままにして、教材化した。

表面的なことに関して言えば、記事は、拡大などはせず、そのままの状態
でコピーした。これは、「日本語の教材」という枠がはずれても、抵抗なく
新聞記事を読める力を育てたかったからである。また、設問は手書きにした。
これは、特に日本に初めて来た数人の学習者から、日本人の手書きの字にな
かなか慣れないという意見を耳にしたからである。

3. 授業の進め方

授業全体の流れとしては、最初の1コマで、導入として、日本の新聞の歴史や種類、普及率（日本人の新聞観、配達制度）についての話をした。それから、最初の1ヶ月くらいは、教師が地域や時事に関する身近で比較的読みやすい記事をピックアップして教材化し、授業で用いた。その際、新聞記事に一定の形式があることを説明した。見出しやリードがあることを前もって知っておくことは、新聞読解の際、手助けとなる。また、見出し、リード、写真、図表は Top-Down に必要な既有的知識や経験の記憶を喚起するのに、有効であると考えられる。その後、学習者自身が新聞記事を選んでくるとい
う形式をとったのだが、その際、学習者が選んだ記事を教師に提出し、それを教師が教材化して、翌週、授業で扱うという形式をとった。

授業は基本的には、以下の過程で行った。

1. 見出しや写真に着目させる。

何を書いてあるのかを既有的知識を出し合って、想像させた。「第一報」でない記事を選んできている場合も多いので、教師や記事を選んできた学生が中心となって、Top-Down を行うための準備をした。

2. リードがあれば、リードを読む。

リードで、記事のあらまし、5W1Hを的確にとらえさせる。

3. 記事全体を黙読させ、問題を解かせる。

4. 記事を選んだ担当者による音読。

新聞記事には漢語が極めて多い。漢語であるため、中国語母語話者にとっては、意味が取れる場合が多いが、読み方がわからない場合も多い。読解能力育成のためのクラスではあるが、本当の意味での語彙、漢字の習得を目指して、あえて音読させる作業を省かなかった。

5. Bottom-Up のための解説

読み進めることを妨げやすい語、表現には以下のようなものがあった。

外来語；ピーク、スポット、シェア、スポンサー、ブーム、アドリブ、ムード、シンポジウム、コメント、アプローチ、バッシング、トップを切る、ランク入り、クリアする、等。

感覚的表現；すがすがしい、パツと輝く、ほんのり、あっと驚く、がっちり、ぞっとする、すすすく、ズラリ、等。

文語的表現；おぼしい、～ざるをえない、いずれも、かつて、このほど、もとより、～がたく、等。

専門用語；セーフガード、直接投資、ミトコンドリア、遺伝子組み替え、確定申告、ストックオプション、株式、本割、横綱、ジェンダー、バリアフリー、等。

固有名詞；人名、観光地の名前、野菜・料理の名前、曲名、等。

中国語と異なる漢語；地道、拝観、配当、新米、更迭、等。

仮名による特殊表記；かく乱、セリフ、終えん、「さらりーまん生態学」。

口語的表現；いけっこない、～じゃん、～もんね、等。

(主に発言の引用の中に現れる。)

慣用的表現、比喩的表現；しのぎを削る、手を染める、目を引く、

目にあまる，斜に構える，頭角を現す，嫌気がさす，身につける，草分け段階，仁王立ち，（喜びを）味わう，（問題が）横たわっている，下手に手を出すとやけどする，（靖国参拝への）地ならし，（日米間の）溝は浅くない，（組織を）立ち上げる，（会社の）生みの親，焦点を当てる，連携を図る，情けにすぎる，「長い物差し」，「29歳って，崖っぷちなの？」等。

（いわゆる常用慣用句から，前の名詞と後ろの動詞の結びつきが強いもの，それから記者が用いた独特の比喩まで，多種多様な慣用的表現，比喩的表現が新聞の中には含まれている。）

6. 問題の解説

7. 担当者の意見とディスカッション

授業の最後に，新聞記事を選んできた担当者に意見を言わせるようにしていたのだが，短絡的なものが多かった。読んだ内容をいかに深く「自分」を通した発話に導くかを今後の課題としたい。ただ，学生の発言の傾向をふりかえてみると，反対意見が述べやすい記事が考えを深めやすい記事であり，ディスカッションにつながる記事であった。活発なディスカッションが行われた記事は「遺伝子組み替え赤ちゃん」，「29歳ってがけっぷちなの？」「学校乱入殺傷事件 首相『法に不備』改正示唆」，「論壇誌にぎわす田中外相批判」などであった。

4. 新聞記事を教材化した効果

最後の授業の際、無記名の自由形式でこの授業に関する感想を学習者に書かせた。その中で、授業の内容に関するものを以下に紹介する。(以下では、学生の書いた原文を尊重した。)

- ・新聞を読む能力がよくなりました。(新聞を) 詳しく読むようになりました。
- ・たくさんの知識を勉強した。
- ・いろいろな新聞がたくさんあります。でも少し難しいです。
- ・新聞から日本のことをわかって、読み能力も強くなりました。以前長い文章はぜんぜんだめでした。今、少し信心があります。でもある記事がちょっと難しいと思います。
- ・楽しかったです。後期は他の内容は勉強したほうがいいと思います。
(小説・見学など)
- ・日本語を通したたくさんの知識を勉強しました。
- ・プリントの字がもう少し大きくなったらいいと思います。
- ・おもしろい授業と思います。
- ・日本語の文法に対して役立つと思います。僕はこの授業のおかげで日本語の文法少しあがりましたと思う。
- ・プリントがちょっと多いと思います。でも学生自分で新聞を選んでから説明した方法はいい勉強だと思いました。
- ・自分好きな新聞を選んで勉強するのはとてもおもしろい。
- ・実用的で役立つと思う。

学習者の感想の中で、「読んだ内容から知識を習得した」という意見が目についた。このことから、授業開始の段階で計画した「知識、経験を増やす」ということに関して、効果があったものと考えられる。また、長文の読解に慣れた生徒がいたことは、速読、多読の能力の育成にも、効果があったもの

と考えられる。文法のことに関して述べた学生が1人いたが、その学生の場合は、Bottom-upの力がついたのでないかと考えられる。無記名であるため、テストの結果等との照合はできないが、自分でなんらかの知識、技能が身についたといえる自信がもてるようになったのは、大きな意味のあることだと言えよう。

また、学習者自身が記事を選んでくることについて書いている者もいたが、このクラスでは、この形式を、好意的に捉えている場合が多かった。記事を選ぶということは、その学習者の個性の表現に他ならなかったからだ。中には、記事を選ぶことを億劫だと訴える学習者もいたが、記事を選ぶということ自体に、スキミングの活動が含まれているので、その活動を省くことはさせなかった。

マイナスの評価の中に「少し難しい」というものがあった。学期の中ごろに、大学側から課せられた学生による教師の授業評定シートでも、7人の学習者が「少し難しい」と答えていた。(9人の学習者は「適当」、5人の学習者は「少し簡単」と答えた。)これは、「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」よりも難しい授業にしなければならないというコースの設定からの影響からかもしれないが、もう一つ考えられることは、選んだ記事がクラスメートに提示されるのを意識しすぎて、自分の能力以上の難解な記事を選んできた学習者がいたという点が挙げられる。クラスメートが難解な記事を選んだことで学習意欲が高まる受講者もいたが、何人かの受講者は、自分のレベルに不相応な記事が選ばれると、学習意欲が低下してしまう傾向が見られた。また、「プリントの字を大きくしたほうがいい」という学習者がいたが、それは、まだ、生の教材に慣れていない証拠であると考えられる。

5. まとめと今後の課題

留学生に日本語教育の中で、新聞記事を読ませるということは、単なる言語学習以上の価値を持つことが、この実践の中で明らかになった。学習者は

新聞を読むことにより、「日本」についての手がかりを得、また、「自分」についての手がかりをも得る。

今後は、読解の後の発言やディスカッションの仕方についても考えてみたいと思っている。

【参考文献】

- 中村重徳 1993 「上級指導——特に新聞をどう教えるかについての一試案」『日本語教育研究 26』
- 青木惣一 1995 「新聞・ニュース教材の時系列語彙調査」『アメリカ・カナダ大学
連合日本研究センター紀要 18』
- 日本語教育学会編 1987 『日本語教育事典』 大修館